



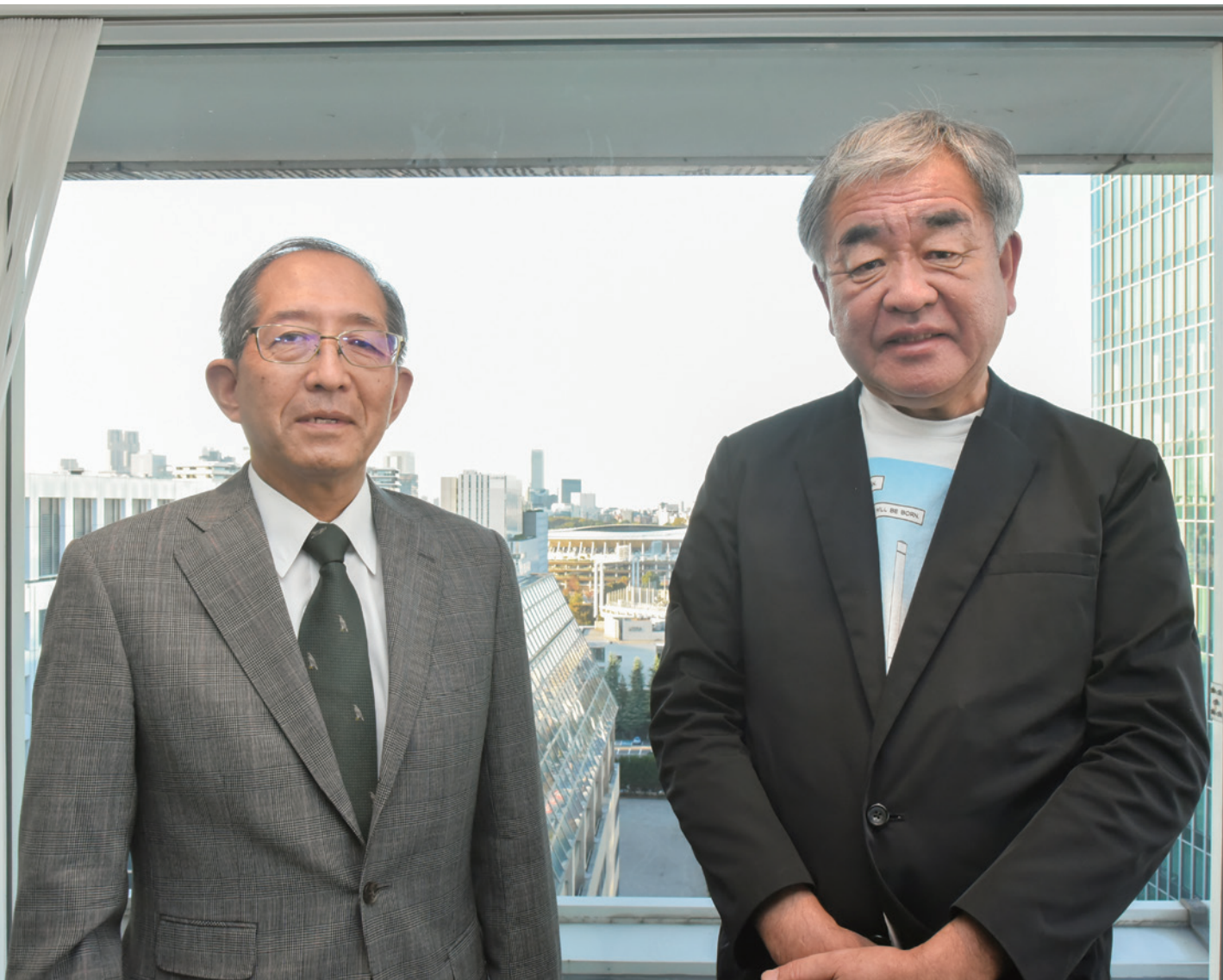
2024(令和6)年
5月31日発行

Vol.92

ELCO RADAR

Ecological Life and Culture Organization

公益社団法人 環境生活文化機構 季刊 エルコレダー



CONTENTS

TOP

建築家 東京大学特別教授・名誉教授 隈 研吾氏インタビュー
身にまとう建築物—コロナ後、人は箱から脱出し始めた— …… 1

《報告》令和5年度リサイクルマーク事業ユニフォームリサイクルシステム実施状況 …… 8

《連載》環境を見つめる人々 74
独立行政法人国立女性教育会館 理事長 萩原 なつ子氏 …… 9

《連載》エコ&ユニフォーム最前線 42 ダイセン株式会社 記者 富永 周也氏 …… 10

《報告》2023年度持続可能な社会づくり活動表彰 …… 11

《案内》2024年度持続可能な社会づくり活動表彰 募集案内 /
第27回環境文化講演会案内 …… 15

身にまとう建築物

—コロナ後、人は箱から脱出し始めた—

建築家 東京大学特別教授・名誉教授

隈 研吾氏

国立競技場の設計に携わったことで知られる建築家の隈研吾氏には、木や石、布など大型建築物ではあまり用いられない素材を使った作品が多い。従来のコンクリートのビルは効率よく人を箱の中に詰め込むものだ、そこから脱け出せ、と訴える。では、どのようにして箱から脱出できるのか。その答えを尋ねてみた。

(聞き手：公益社団法人環境生活文化機構会長・小林正明)

箱の中の1世紀

小林 私どもの団体は、衣料、中でもユニフォームのリサイクルを通して環境を守るための活動を長年してきました。そういう立場から申しますと、やはり気候変動や地球温暖化の問題は相当に深刻だと受け止めています。それに追い打ちをかけるように新型コロナウイルスによるパンデミックが世界を襲い、同時にウクライナやイスラエルなどで起きた戦争の火の粉が、いつどこに飛び火するかもしれないという不安。そういう中で、隈さんがこうした世の中の動きをどのように捉えていらっしゃるか、そしてご自身の建築にどう反映させようとしているのかうかがえないでしょうか。

隈 地球環境問題というのは、もちろんここ30年ほどますます大きな問題となってきているのですが、僕にとっては、それ以上に新型コロナウイルスの感染拡大がもたらしたある意識の変化に注目しています。

コロナ禍の中で一時期“密”ということが盛んに叫ばれました。オフィスという閉じられた箱の中にみんながこもって仕事をすれば、感染のリスクが高まるからです。オフィスという密を避けるためにリモートワークをする人が一気に増えました。その結果、僕

らは気づいたのです。オフィスビルの箱の中に閉じこもって仕事をしていては、心も体もストレスでいっぱいになってしまうと。本当はコロナ前から気づいていたのですが、コロナを経験することで、今まで諦めていたオフィスという密な箱の中での仕事から脱け出したいという意識を、みんながはっきり持ち始めたわけです。この意味は大きかったと思います。

このように、コンクリートの箱の中に閉じ込められて、いわゆる密の中で働くようになったのはいつからかと考えると、20世紀の初めに高層ビルができ、エアコンができた時代がその始まりで、僕らはそこを脱することができずにきたのではないかと。

いまやITを活用すれば、そういう密を避けて仕事ができることが分かったわけです。仕事のほとんどはリモートでも可能だと分かったにもかかわらず、人間社会というのは、一度なにかのスタイルが決まってしまうと、その惰性からなかなか脱け出せず、1世紀以上経ってもまだ同じことをやっています。さらに懲りずに、今も都心に高層ビルをバンバン建て続けています。コロナ禍を経て、この愚かさは皆さんの心に突き刺さったのではないのでしょうか。

密からの脱出

小林 密への抵抗が高まると、オフィスや住居に対

する私たちの発想も変わっていくでしょうね。都市の在り方自体が変わっていくかもしれません。あるいは都市と田舎の関係が変わっていくのかもしれません。

隈 両方だと思います。都市の在り方でいえば、密の箱をどんどん建てていった結果、箱を建てた分だけ空き家が増えてきています。都心部は一見成長しているように見えるけれど、人間が働いたり住んだりする環境としては、どんどん歪なものになっています。この問題はずっと放置されたままです。

それから都市と田舎の関係も、田舎の過疎化が進み続けているという問題は、やはり放置されています。その両方の問題に対して、僕らは僕らなりの新しいビジョンを出さないと、人類自体がこれ以上持たないのではないかと不安になってきます。

小林 隈さんご自身の事務所では、コロナの時にどうなされたのですか？ リモートワークにしたのですか？

隈 僕の事務所ではサテライトオフィスをつくってみました。スタッフがオフィスに出て来られなくなって、リモートで家にいながら仕事をしてもらったのですが、やはり東京の家というのは、その在り方自体が問題でして、あまり健康的な感じがしないわけです。それなら都会を離れて自然の豊かな田舎にオフィスを設けてみようと思ひまして、まず北海道と沖縄の田舎に小さなオフィスを借り、希望するスタッフにはそこに移り住んでもらいました。いまま実際にそこをサテライトオフィスとして仕事をしているスタッフがいます。

そのひとつになりますが、北海道の東川町ひがしかわという田舎町に木造のサテライトオフィス群「KAGUの家」というのを建てまして、そのうちのいくつかを、実際に僕の事務所ですべて使っています。東川町というのは旭川の隣りにあり、自然に恵まれた町です。そこに僕の事務所から夫婦2人を含む5人が移り住みまして、そのサテライトオフィスで働いています。

やっぱり子育てというのは、生き物としての人間の潜在的な部分につながってくるものなので、都会での子育てでは、人間本来の在り方に合わないと感じかされました。私も時折、彼らの仕事ぶりを見に東川町に行くんですが、みんな本当に生き生きとしているんです。彼らが都会の設計事務所にいた時は、オフィスビルの箱の中に詰め込まれて、若い連中だと上からいろいろとプレッシャーをかけられていました。ところが北海道に行くと、子供が事務所の中で走り回っているような所で伸び伸びと仕事をしているんです。本当に人間が変わったなという感じがしてきました。その建物はもちろん木造で、やっぱりこうい

う環境の中で仕事をする決めてよかったと思っています。

サテライトオフィスで人が変わる

小林 そういう環境ですと、やはりいい発想が浮かんだり、クリエイティブな成果が出てきたりするものですか？

隈 やはり違いますね。上から言われた通りに仕事をするのではなくて、自分の責任でやるようになってきました。顔つきも変わってきてますね。彼らは地元の人たちとも積極的に交流を持つようになり、そこで知り合った人たちと新しいプロジェクトを立ち上げたりもしています。都会にいた時は、同じぐらいの歳の同僚と連れ立って飲みに行って愚痴を言う程度だったのが、今では土地のコミュニティに自ら溶け込んで暮らしている。そんなことは都会ではできないでしょうね。

小林 少子化対策は政府の大きな課題でもありますが、どちらかという経済的なサポートが中心です。お話を聞くと、むしろ住み方とか暮らし方の面でどれだけ子育てしやすいかが問題なのでしょう。そこが良ければ次のお子さんも、ということにつながってくると思います。

隈 実際にその東川町は、北海道の中でも移住者が増え続けている町なんです。今では人口の半分以上が他の土地からの人なんだそうです。木工家具の町でもあって、緑の豊かな環境の中で木を中心にした産業もあります。それから学校の先生方も研究会やセミナーにすごく力を入れていて、学校教育も充実しているようです。

この町には上水道がないんです。大雪山系からの湧き水をそのまま生活用水として使っているんですね。



隈研吾建築都市設計事務所内の国立競技場が見える一室にて。

@y.masuda

蛇口をひねればミネラルウォーターが直接出てくるわけです。人間の健康を考えると、その点もアピールポイントだなと思ったわけです。

オンラインとオフラインの使い分け

小林 オンラインでのコミュニケーションが普及したのは、コロナのいい意味での副産物ですね。しかし、今でも全員出社せよという会社がありますし、逆にほとんどオンラインでやっている会社もあります。どちらにすべきか、世の中はまだ模索中のようなですね。

隈 情報関連の人たちには、オンライン派が圧倒的に多いですね。クリエイティブの世界では、逆に顔を突き合わせなきゃ仕事ができない、という人も結構います。でも、常に全員が顔を突き合わせなければいけないというわけではないでしょう。例えばデザインの世界というのはファッションとブランディングになりますが、それらのビジネスのかなりの部分は国際的なコラボレーションになってきています。ですから、いわゆるソフトビジネスというのは、オンラインとオフラインをどうメリハリをつけて使い分けられるかですね。逆に、その使い分けがうまくできるかどうかはその人の能力だとも言えます。

外部空間を取り込む建築

小林 隈さんは木を素材とした建築物で有名です



公益社団法人環境生活文化機構 小林 正明会長

@y.masuda

が、確かに木の質感は柔らかで心地よいですね。環境的にもサステナブルだと思います。コンクリートの箱から脱け出せという先ほどからのお話の意図も、隈さんの建築物から実感できます。実際に建物の内部に入ると、どこか箱の外の世界ともつながっているような気がしてくるのですが、そうした内部と外部の関係をどう捉えているのでしょうか。

隈 建築として外部の空間をどう取り込むかということですね。箱としてのオフィスでは、仕事する場所はその箱の中です。そこは空調されていて、それなりの快適な環境にはなっています。それに対して外部の空間という場合、どういう行為に対応する空間であるかによって違ってきて、外部空間という定義も曖昧ですが、例えば外部空間であるテラスで仕事はどうできるのか、そこで食事もできるのか、それを建物としてどう取り込んでいけるのか、それらのことが箱から脱け出たこれからの働き方の鍵ではないかと思っています。ものすごいエモーショナルであっても、日陰をつくり、風を通すということが大切だと思います。風が通っていると体感温度も下がって涼しく感じられるので省エネにもつながりますしね。

建物は、場に置かれた衣服

小林 箱からの脱出には外部空間の利活用も有効だということですが、そうすると、個別の建物だけではなくて、外部である街の在り方みたいなところにまで問題は広がってきそうですね。

隈 そうです。建物だけでスマートビルとかエコビルとか考えていても駄目でして、やはり街全体をデザインして運営していくような発想が必要になります。

小林 今も東京は各地で再開発が進められ、高層ビルが誕生し続けています。そうすると、一体東京はどうなっていくのかと心配になってきますね。

隈 本当にそうです。ビル単体ではどんどん進化して、より高くなっていきます。それなりに軽装部の作り方を豪華に見せるなどの進化はしているけれど、この進化の行き先に対して不安を抱いている人も多いと思います。

本来、建築物というのは「場に置かれた衣服」のようなものだと思います。むしろその建築物という場の衣服は、移動や変化もしていくもので、その建築物がむやみに頑張りすぎると場の環境に対して悪さをするようになります。

愛知万博から学んだこと

小林 実際、場のもつ環境を無視した頑張りすぎている建物が目につきますが、そこで少し古いのですが、環境をテーマにした初めての万博である愛知万博のことについてうかがいたいと思います。この万博には、構想の段階で隈さんも携わっていましたが、結果としては不本意なものだったと述懐されています。

実は当時、私は環境省の環境アセスメントの担当をしており、その立場から愛知万博に関わらせていただきました。会場となった瀬戸市の海上^{かいしよ}の森を巡り歩きまして、反対運動の方々とも話し合った結果、最終的には近くにある運動公園を会場にするという、かなり異例の形を提案したりもしました。後になって、隈さんが海上の森にふさわしい展開を構想されていたのを知り、いま考えればそれに乗りたかったなという気もしています。

隈 当時、もっとITが一般化していたなら、また違った展開になったかもしれません。でも、その時の経験は僕のその後の仕事に活かされたと思います。例えば、那珂川町馬頭広重美術館とか中国の万里の長城の麓にある「竹の家」などの設計がそうです。これらには愛知万博から学んだことが反映されていて、結果として国際的な注目もいただけたわけです。そういった意味で愛知万博では大変貴重な経験をさせていただき、僕自身のひとつの転機だったと思っています。

具体的には、愛知万博で里山というアイデアが出てきたのが重要だったと思います。それは単に森を守るということではありません。森と人間はどのように共生できるのか、森というシステムに人間が介入し、そこから何を収奪してくるのか、それが里山の考えです。この里山の仕組みをサイエンティフィックに考えられるようになりました。それまでの建築家は、自然というものに対してエモーショナルであって、サイエンティフィックな面に欠けていたと思います。

科学的に捉えて見えてくる自然

小林 自然に対してエモーショナルというのはどういうことでしょうか。

隈 自然の形を、例えばオーガニックな形をモチーフに使えば、それだけで自然を大切にしたい建築物だとしていたわけです。あの当時、いろいろと論争し

た相手の一人に黒川紀章さんがいますが、黒川さんは「自然との共生」と言っておられ、自然への強い関心を示しましたが、それにもかかわらず、僕から見るとそのデザインはエモーショナルなアプローチだったと思います。逆に僕は、愛知万博で生態学や農業研究者たちがサイエンティフィックに自然を見ておられるのに触発されました。

小林 愛知万博では自然保護団体からの厳しい批判もあったのですが、その人たちと議論をしても、環境をテーマにした初めての万博をつぶしてしまいたくないという気持ちは共有できました。そこで話し合いの中でどうにか成功に持っていったわけですが、隈さんからご覧になって、もっと自然に対する科学的なアプローチをすべきだという思いがあったわけですね。

隈 そうです。デザインの世界でも、自然を科学として捉え始めたということです。それまでのデザインの世界は、単に「自然」、「自然」とエモーショナルに叫んでいただけです。例えばフランク・ロイド・ライトも『自然な建築』という本を書いて、自然をテーマにした建築もしているけれど、すごくエモーショナルなんです。サイエンスの側の人との接点が実際にはほとんどなかったからです。ですから愛知万博のように、いわゆる景観に対する批判みたいな形で科学者たちとお付き合いし始めたことは、私にとってはいいことだったと思います。

地域の方と科学者とデザイナー、この3者の立場



建築家 東京大学特別教授・名誉教授 隈 研吾氏

@y.masuda

は違うんだとその時つくづく実感しました。その後の全てのプロジェクトで、こういう立場の違う人たちとどう議論して決めていくべきか、そういったことも学べました。

0からの建築 vs. リノベーション

小林 それは、東日本大震災の復興事業についてもいえることですね。震災が起きて12年、干支をひと巡りして、復興が進んだところもありますが、中核のところではなかなか避難した人が戻ってこない、戻って来れない、という状況で苦勞してるところがほとんどです。

私も放射能の除染をするなど環境面で被災地と関わってきているのですが、どういう形が本当の復興につながるのか、悩んだり模索しています。中には町がそっくりなくなってしまったような所もあるわけです。町自体を再建するのはとても苦勞が多いことでしょう。

隈さんも被災した町の復興にいくつか携わってますね。福島浪江町の復興構想なんかも拝見しました。また、宮城県南三陸町では「志津川さんさん商店街」も設計なさいましたが、あれは素晴らしいなと思いました。

隈 さんさん商店街というのはある意味ですごく成功したプロジェクトでした。今でも多くの人がこの商店街に来てくれますが、その商店街には人は住んで

いません。高台に新しい造成地を作って、そこに住んでいます。僕らが目指した風景、昔の町が持っていた活気とかそういう懐かしいものとは違っていません。それをもう一度呼び戻すのはものすごく難しいと思いましたね。

小林 南三陸町には私も多少関わってきたのですが、被災地での復興の在り方、さらにそれを通して、地域の将来像にもつながるプロジェクトについて、お考えになっていらっしゃる場所をお聞かせください。特に浪江町の場合はほとんどゼロからの復興になりますね。白紙からということで逆にやりやすいのかもしれませんが。

隈 矛盾した答えかもしれませんが、ゼロからの再建というのはむしろ難しいと思うんです。すでにあるものに対してリノベーションする方がいいですね。東北の被災地の場合は、全くのゼロからの復興ということで、自由度があつてよかつただろうとよく言われます。けれど、むしろ以前からあつたものに手をつけることで、造った人の気持ちやその土地の環境・文化というものが感じられて、それに対するいろいろな知恵が湧き出てくるわけです。要するに建築はリノベーションが一番なんです。建物というのは経年変化していくものであり、リノベーションによって手を加えられ、再生することでより魅力を増すものだと思います。さらに資源の有効利用にもつながりますしね。

リサイクルした素材で新しく造る場合もありますが、それを使う側としては、そのリサイクル材に履歴が染みついているわけではないので、本当のありがたみは伝わってきません。やっぱり以前の建物が体感できないと、使う側にしては単なる新品の材料という感じになります。ですから、僕はデザイナーとして、リノベーションという形で絡んでいくのが王道ではないかと思っています。

IT時代の参勤交代

小林 リノベーションの方が創造性が湧いてくるのですか、面白いですね。そこで、先ほどのリモートワークの話に戻るかもしれませんが、都会と田舎の関係をもう一度考えてみたいのです。

日本は少子高齢化で人口は減っていくでしょうし、懐かしい田舎も継続できなくなるところも出てくるでしょう。田舎を捨ててみんな都会に来たらいい、というわけにもいきません。どうやって過疎の地域が



@y.masuda

継続していけるのか。10年先、20年や30年先を考えた時に、地方というのはかなり大きな変動を迫られるのでしょうか。その時、オンラインであるとか、オフィスや住宅の分散とか、子育てだけでも地方などと、先ほど来のお話にはいろいろなヒントがありました。あらためて、これからの都会と地方の関係から、暮らし、住まい、希望、将来像みたいなことで何かお考えをお聞かせください。

隈 解剖学者の養老孟司さんが30年ぐらい前からよく参勤交代ということを提唱していましたね。心身両面での健康を保つには、都市と田舎の両方に生活の拠点を持って、その間を往復しながら暮らしなさいというわけです。この提案は面白いけれど、一般の人にとっては夢物語じゃないかと当時は思っていました。

コロナ禍を経て、実際に僕らがサテライトオフィスをつくってみますと、結果として養老孟子さんの言う参勤交代に近い形になっているんですね。僕の所のスタッフも、しばらく地方のサテライトオフィスで仕事していて、そろそろ帰ろうかと思って戻ってきている。こういう風に、仕事や生活の拠点を移動するようになってきています。江戸時代のような強制的な参勤交代ではなく、自主的な参勤交代がコロナ以後に起きてきている感じがします。

考えてみれば、狩猟採集時代の人間は季節ごとに移動していました。むしろ人間は移動するのが普通のスタイルだったわけです。今のような定住生活の時代より移動が当たり前だった時代の方がはるかに長いわけで、その遺伝子があるからこそ僕らはいまだに観光をしたり、海外旅行に行きたくなるのでしょう。そういう人間の原初的な思いを都市とか町のデザインに当てはめていけないか、人間の狩猟採集的な本能を都市デザインの中にうまく埋め込むようなことができる面白いと思うんです。

被災者が戻ってきたくなる町

小林 日本ではどうなのでしょう。都市計画というのはあまり生かされていないというか、現実に都市計画があったとしても、日本人は大きな構想に合わせて都市をつくっていくのは苦手だと悪口を言う人もいます。そんな中で、隈さんは浪江町での復興には、建物だけではなく、町全体のランドデザインから携わっていますね。

隈 復興プロジェクトの中でも、福島浪江町は放

射能汚染の問題があって、条件として厳しい点があります。その一方で、いくつか恵まれている点もあります。そのひとつが水素の利用です。浪江には世界でも最大級の水素製造拠点があるんです。ここでは水素で走る燃料電池自動車の普及をはかっていて、水素をエネルギーとして活用することでCO₂削減につながり環境問題にも貢献できます。水素エネルギーに関しては、日本が非常にアドバンテージを持っていて、それをうまく活用したまちづくりにしようとしているわけです。

もうひとつは、木材加工の大きなプラントができたことです。これを通じてできることは、単なる復興とは違います。環境に配慮したある種の新しい社会の創設ともいえるもので、私がいま一番力を入れているプロジェクトでもあります。

小林 浪江駅前の整備計画案を拝見しましたが、駅前に「なみえルーフ」という大きな木の屋根を架けて駅前の商業施設とつなげるのだそうですね。これは完成後も引き続き関わっていかれるわけですか。

隈 そのつもりです。建物というのは時間が経つと変わっていくものですからね。浪江のまちづくりとは、浪江の人たち自身にとって意味があるかどうかが問題なんです。だから、昔の駅前の通りがなくなってしまうのは寂しいという人も多くいますが、その通りは全く無人で、ただ物だけがある状態になっています。それをノスタルジックに保存するのではなく、新しい環境の町として作り直そうとするのですか



@y.masuda

ら、果たして避難した浪江の人たちがそれを受け入れて帰ってきてくれるかどうか問題です。それによって僕らのプロジェクトは試されるわけです。そのように試されているという試練に耐えられるものを、つくっていきたくと思っています。

身にまとう建築物

小林 たいへんな覚悟をもって当たられているんですね。この浪江の駅前には、トレーラーハウスのような移動できるオフィスも造られていますね。

隈 「ナミエシカ」というコワーキングスペースです。町民はもちろん、町民以外の人でも、ビジネスでちょっと来られた方なんかが無料で利用できる箱のような建物です。「住箱」と呼んでいまして、簡単に移動もできます。

僕は自分の意識の中で新しい狩猟採集のスタイルを探しているわけです。コロナ以後、その思いはますます強くなりました。

狩猟採集の時代にもう一度回帰しようとする、養老孟司さんのいう「参勤交代」みたいなものにつながってくるのだと思います。狩猟採集の時代にまで戻ると、家も持ち運び可能なものに近づいてくるわけです。身にまとう衣服と持ち運べる家とは、非常に近かったはず。「住箱」というトレーラーハウスは、狩猟採集時代の人間が持っていた原初的な生活スタイルに近づけたものです。

小林 遊牧民のパオみたいですね。

隈 まさにそうです。「住」は「衣」の延長にあると考えるわけです。固定された箱の中に詰め込まれるのではなく、衣服のように建築物を身にまとう感覚です。同様に、僕らはいま幕を使うということにも興味があるんです。東京の山手線の新駅「高輪ゲートウェイ」駅みたいに膜を使ったり、表参道の角でいま設計中の建物でも幕を使ったりして、それを庇にして日除けに使っています。膜を使うのは日除けのためだけではありません。建物全体に衣服のような柔らかさを持たせることができるからです。

このように衣服と建築の領域が近づいてくると面白いなと思っています。実際の建築物に膜を使っただけではなくて、本当に衣服のデザインもしてくれという依頼も時々あって、受けているんですよ。

小林 ファッションデザインもなさるのですか。

隈 ええ。ひとつはイタリアのアウトドア用品の会社なんです、東北の復興をテーマにした服をつくり



国立競技場の模型の他に隈氏デザインのジャケット、日本建築の木組みの技術を生かしたユニークな積み木など、建築の枠を越えた作品が別フロアにある事務所の一角に展示されている。
@y.masuda

たいと言ってきました、刺し子ジャケットというのをデザインしたんです。刺し子は東北の伝統的な文様ですから、その刺し子をモチーフにしたジャケットをつくって、それを東北の復興を応援してくれる人たちに少し高めの値段で買ってもらい、NGOにそのお金を寄付するというようにしています。まさに衣服も建築物も領域としては近づいてきて、いま新しいスタイルが求められているのだと思います。その新しいスタイルを創造することが僕らの仕事、つまりデザインの仕事なんだと思います。

小林 建築家という枠を超えた活躍をいまなさろうとしているんですね。非常に楽しみにしています。本日はお忙しいところをありがとうございました。

建築家
東京大学特別教授・名誉教授
隈 研吾 (くま けんご)

1954年生。1990年、隈研吾建築都市設計事務所設立。慶應義塾大学教授、東京大学教授を経て、現在、東京大学特別教授・名誉教授。50を超える国々でプロジェクトが進行中。自然と技術と人間の新しい関係を切り開く建築を提案。主な著書に『全仕事』（大和書房）、『点・線・面』（岩波書店）、『負ける建築』（岩波書店）、『自然な建築』、『小さな建築』（岩波新書）、他多数。

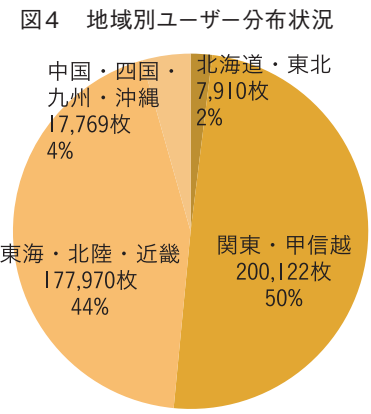
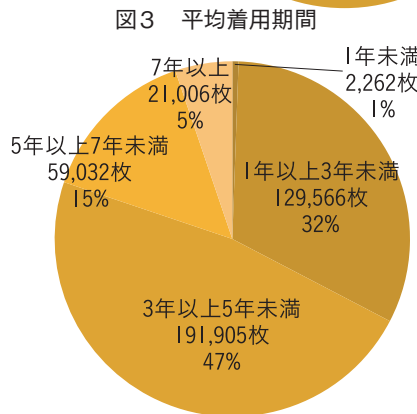
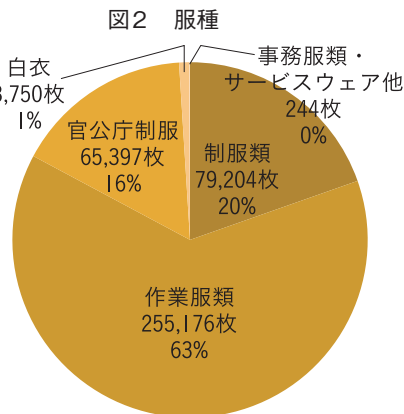
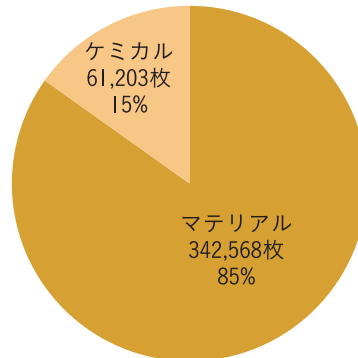
令和5年度リサイクルマーク事業 ユニフォームリサイクルシステム実施状況

本機構は、環境保全に配慮したユニフォームのリサイクルシステム提供事業（リサイクルマーク事業）を実施しています。「ユニフォームリサイクルシステム」は、環境保全に配慮しているユニフォームにリサイクルマークを縫着し、製造から販売、供用、そして使用済みとなり適正に再生利用されるまでユニフォームの生涯管理を行うことで、廃棄物の減量や有害物質の発生削減を目指すシステムです。 図1 リサイクルマークの種類
令和5年度の事業実施状況は、下記のとおりです。

1. リサイクルマーク交付状況

リサイクルマーク交付枚数は40万3,771枚、交付件数は661件でした。

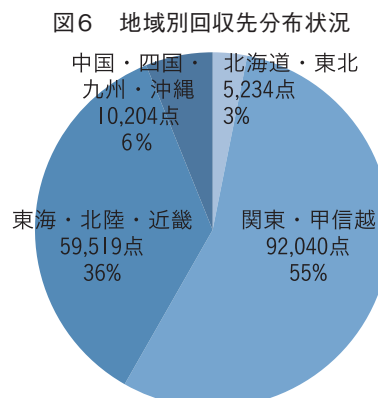
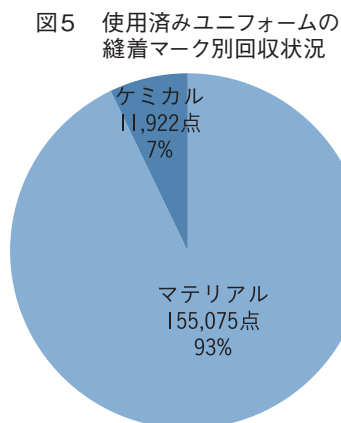
内訳は、マテリアルリサイクルマークが34万2,568枚（349件）、ケミカルリサイクルマークが6万1,203枚（312件）です。（図1～4参照）



2. 使用済みユニフォームの回収状況

使用済みユニフォームの回収点数は16万6,997点、回収件数は1,145件でした。

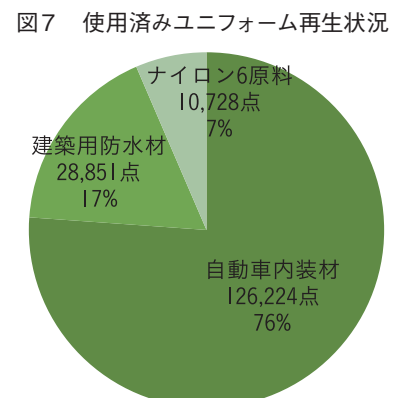
内訳は、マテリアルリサイクルマーク付ユニフォームが15万5,075点（1,133件）であり、ケミカルリサイクルマーク付ユニフォームが1万1,922点（12件）です。（図5、6参照）



3. 使用済みユニフォームのリサイクル処理状況

リサイクルマーク付使用済みユニフォームの処理は16万5,803点（約74.6t）でした。

内訳は、マテリアルリサイクル処理が15万5,075点（約69.1t）、うち自動車内装材に12万6,224点（約55.6t）、屋根下防水材に2万8,851点（約13.5t）再生されました。ケミカルリサイクル処理は1万728点（約5.5t）、全てもとの原料に還元されました。（図7参照）



ハチ公の故郷で考えた 「環境」と「生活文化」

独立行政法人国立女性教育会館 理事長 萩原 なつ子氏

昨年末の土曜日の夕方、東京駅を出発し、新青森経由で奥羽本線に乗り換え、秋田県大館駅をめざした。もうすぐ日が変わるという時間に大館に到着。駅前にはなんとハチ公の銅像が鎮座していた。前日のニュースで「秋田犬お散歩会 IN 渋谷」のイベントで渋谷の街を練り歩く、秋田犬の姿が映し出されていた。そう、大館は忠犬ハチ公、秋田犬の発祥の地。ハチ公の生誕100周年という記念すべき年に、大館に来られるなんて、なんというめぐりあわせだろうか。翌日、仕事先のNPOのスタッフが、本物の秋田犬に会えるからと、駅前にある観光施設「秋田犬の里」に連れて行ってくれた。モフモフの秋田犬の無邪気に遊ぶ姿に心が癒された。それだけでなく、秋田犬に関する興味深い話もいろいろ知ることができた。日本にいる和犬6種類のうち、国の天然記念物に指定されたのは秋田犬が最初であること、地元の有志が雑種化を防ぐために昭和初頭に「秋田犬保存会」を設立し、戸籍ならぬ、犬籍登録によって秋田犬を守っていることも新たに知ることができた。かつては大館犬と呼ばれていて秋田犬は、古代から伝承された土着の犬で、もともとはマタギがクマを捕まえる狩猟犬として活躍していたそうだ。

クマといえば、日本各地の集落で目撃されるようになっており、農作物被害だけでなく、痛ましい人的被害も報告されている。大館市内でもクマ出没情報が相次いでいて、「あのあたりにツキノワグマが現れたらしいですよ。うろろ歩いているで大騒ぎになったようです」とスタッフが教えてくれた場所は本当に街中で、とても驚いた。クマ出没に関する警報も発令されているという。どうしてこんな人が多くいる場所にまでクマがくるの?! スタッフ曰く「やっぱり冬眠前にたくさんの木の实を摂取しなければならないのに、生息地の山の環境悪化で好物のドングリの実などが足りないから、人里に下りてくるしかないからでしょう。人家の周りには実のなる木がありますからね」。

確かにニュースで柿の実を食べている映像を見たことがある。理由はもう一つ。「マタギの数が減っているのも原因らしいです」。「マタギの減少」が気になってネット検索してみたところ、大館市の隣、北秋田市・阿仁地域はマタギ文化発祥の地であることがわかった。HPの情報によれば、マタギとは東北地方や北海道で厳しいしきたりを守り、かつ動植物の生態に配慮しながら集団で狩猟を行う者を指している。そして後継者不足で絶滅の危機に瀕しているマタギという生活文化の衰退が狩猟の減少となり、結果としてクマなどの野生生物の増加に影響しているようなのだ。当然のことながら山里のクマ密度が高くなれば餌の奪い合いになり、餌を求めて活動範囲を広げて人里に出没するのは想像に難くない。「人と動物、自然環境との持続可能なよりよい関係を築くことが大切」と頭ではわかっているが、現実の課題を突き付けられると解決方法は一筋縄ではいかない。うーん、本当にクマった、などと伝統的なダジャレを言っている場合ではないほど、事は深刻であることを大館で実感した。

参照：<https://oriyamake.com/matagi/>



もふもふ感つたわかな〜。秋田犬の里にて

2024年、物価高でも 売れるユニフォームの条件は

ダイセン株式会社 記者 富永 周也氏

2023年、ユニフォーム業界は、経済活動の正常化によって回復基調となったものの、原燃料価格の高騰に円安に悩まされました。製造・流通のコストを価格に転嫁しようとしても、低価格に慣れているユーザーは、すぐには買ってくれません。一方で「気候沸騰」と言われた夏の猛暑で、電動ファン（EF）付ウェアをはじめ暑熱対策商品は好調で、品薄になる型番もありました。「必要であれば多少高くても買う」という購買動向が顕著だった年ともいえます。ダイセン株式会社の「繊維ニュース 別冊ユニフォーム総合特集」（2023年11月24日発行）では、メーカー41社と販売会社33社にアンケート調査を実施。直近の市況と、2024年の業界を展望しています。

まず、1年間の「売りに上げに貢献したユニフォーム」（複数回答）はEF付ウェアが6年連続の1位。「製造業ワーキング」が2位、「建設業ワーキング」が3位と続きます。この2種は毎年2～3位を争う貢献商品で、今年も存在感を示しました。「接客サービスウェア」も回復しています。コロナ禍で停滞していたサプライチェーンが正常化し、観光・飲食業が活気を取り戻していることなどが実需を押し上げていることがうかがえます。

続いて、素材で1年間の傾向を調べました（複数回答）。1位はニット、定番素材のポリエステル100%、ソフトE/Cツイルが続きます。注目すべきは、4位の「リサイクル素材」でしょう。さまざまなメーカーが再生原料を使ったユニフォームを発売、大手企業を顧客とする納入向けでは、サステナビリティに訴求する素材が必須となっています。

素材メーカーも環境に配慮した打ち出しを強めています。東レは、ユニフォーム素材でも環境配慮型素材を充実させており、環境配慮型素材としてバイオマス原料によるポリエステル繊維とナイロン繊維「エコディア」を重点提案。再生ポリエステル繊維、再生ナイロン繊維「&+」（アンドプラス）もユニフォー

ム用途で採用が拡大しているということです。

クラボウは、環境配慮型素材として、裁断片などを独自の開繊・反毛技術で再資源化する「ループラス」をユニフォームへも本格的に提案しています。耐久性に優れる素材として一般にも知られる素材ブランド「コーデュラ」で、インビスタジャパンは、ナイロン66の原着糸「コーデュラ トゥルーロック ファブリック」の販売拡大に注力中。耐摩耗性など本来の強度に加え、耐UV退色や耐変色性などが特徴。さらに、製造工程に必要な水やエネルギー、発生する二酸化炭素を削減し、環境負荷低減の面からも訴求しています。

24年も市場を取り巻く環境は不透明です。しかし、SDGs（持続可能な開発目標）やサステナビリティへの配慮が必須になってきた今、環境への取り組みは、長いデフレで利益率が低下したユニフォーム、さらには繊維業界を再び活性化させる原動力になる可能性を持っているといえるでしょう。



アウトドアブランド「パタゴニア」のワークウェア。環境保護のリーディングカンパニーとして知られるメーカーの提案に、ユニフォーム業界からも注目が集まる（「第13回ツールジャパン」展）

2023年度持続可能な社会づくり活動表彰

本表彰は、持続可能な社会づくりの推進を目的に、持続可能な社会づくりに資する地域社会・国際社会への貢献、資源循環、環境教育及び生物多様性保全活動等の企業・団体が実施する活動の中で特に優れた活動を顕彰し、その活動を全国に広く発信することで、民間の環境活動を活性化し、個人、そして企業・団体、地域といったコミュニティの価値観と行動の変革をもたらすことを目指しています。

持続可能な社会づくり活動表彰概要

■表彰の種類

環境大臣賞

環境保全に資する持続可能な社会づくりに資する活動の中で特に優れた活動を実施している企業または団体。

地域づくり活動賞

地域交流を促し、地域を活性化させる環境保全に資する持続可能な社会づくりのための優れた活動を実施している企業または団体。

ESD 活動賞

持続可能な社会の担い手の育成に関する優れた環境教育活動を実施している企業または団体。

資源循環活動賞

資源循環の促進に関する優れた活動を実施している企業または団体。

生物多様性保全活動賞

生物多様性を保全するための優れた活動を実施している企業または団体。

■審査基準

- ・持続可能な社会づくりに資すること。
- ・継続的、かつ一定頻度の活動であること。
- ・波及効果または啓発・教育効果があること
- ・将来にわたり持続するビジョンを有すること。
- ・一定の面的広がり、または地域性のあること。
- ・持続的な発展に向けた工夫や独創性があること。
- ・地元自治体、地域住民、NGO 等との連携が図られていること。

■審査委員会

- 委員長 小林正明 公益社団法人環境生活文化機構 会長
 委員 竹内恒夫 名古屋大学 名誉教授
 委員 星野智子 一般社団法人環境パートナーシップ会議 副代表理事
 委員 森 高一 NPO 法人日本エコツーリズムセンター 共同代表

1. 受賞活動紹介

2023 年度持続可能な社会づくり活動表彰として次の 5 者が受賞されました。

環境大臣賞

サンデン株式会社 施設管理セクション ECOS チーム (群馬県前橋市) 「サンデンフォレスト 森・人・工場をつなぐ新しい里山へ ～ 20 年の挑戦～」

自動車機器メーカーによる社有林保全・活用。
 赤城山南麓に位置する事業所敷地 64ha の半分を工場、半分を森林・緑地として生態系が復元するよう「近自然工法」を用いて造成した。地域の環境教育の拠点として社内外問わず体験プログラムを提供し、多様な団体と連携することで地域の環境活動拠点としても活用されている (累計 10 万人超)。さらに「生物多様性が向上する事業所の森」を目指し、森林の育成・環境モニタリング調査を定期的に行い、20 年間継続した維持管理を実施。現代の“新しい里山”の形として同地は、勤労の場、教育の場、交流の場、研究の場等、様々な人間活動が自然とともに共存して行われる舞台となっている。



地域づくり活動賞

NPO 法人 SDGs Spiral（福岡県北九州市を中心に全国）

「SDGs 万華鏡 “KAGUYA” プロジェクト ～子ども達の笑顔は未来への輝き～」

万華鏡をキーワードにした NPO の環境教育プロジェクト。

「竹林整備・森林保全」「海岸清掃」「ワークショップ」の3つの活動を通して、様々な人や団体がつながり、持続可能な社会の実現に向け、山や海など様々な課題を同時に解決・改善しながら SDGs 万華鏡を作る取組。これまでに多様な連携を通じ全国・世界で 50 回を超える活動に取り組み、参加者は累計 3,000 人以上にのぼる。同団体の主催活動に留まらず、障がい児や高校生などの次世代、世界各国の

教育機関に知識・技能を提供することで、同活動が全国・世界に広がり波及効果を出している。



株式会社サンエービルド工業 サンエー会

「プロジェクト「O」・鳥沼公園オオハンゴンソウ防除活動」（北海道富良野市）

建築事業者関連企業親睦団体による地域の生態系保全活動。

開拓以前の富良野原野の面影を今に伝える鳥沼公園は、豊富な湧水をたたえた鳥沼や湿地林に特徴づけられ、住民に憩いと安らぎの場を提供し、自然と身近に触れ合える貴重な自然公園である。近年、特定外来生物のオオハンゴンソウが繁茂し自然環境の改変が進んでいたが、2010 年よりサンエービルド工業とその協力会社で構成されるサンエー会および富良野市博物館が主体となり、オオハンゴンソウの抜き取り防除と看板設置などによる普及啓発活動に取り組んできた。これによりオオハンゴンソウの個

体数の減少、全体的な丈の低下や根茎の矮小化が進み、オニシモツケ等の在来種が増加してきている。



ESD活動賞

公益財団法人SOMPO環境財団

「CSOラーニング制度」によるユース世代の環境人材育成の取り組み」（全国）

CSOへのインターン派遣による環境人材育成活動。

大学生・大学院生を、全国約 40 団体の環境活動を行う CSO（市民社会組織、NPO・NGO を包含した用語）へ、約 8 カ月間の長期・有償インターンとして派遣する制度。インターン生は期間中受入先団体の一員として、広報やイベントの企画運営、調査研究などの業務に従事するほか、月に一度同期の仲間と集まる定例会を開催し、交流を深めている。「木を植える人を育てる」という財団の理念を実現し、学生の学びと受

入れ団体の活性化を両立する「三方よし」の運営をすることで、20 年以上継続し、累計 1,276 名の修了生がおり、社会に多くの環境人材を輩出している。



生物多様性保全活動賞

キヤノン株式会社 下丸子本社 下丸子施設部

「Canon BirdBranch Project ～『下丸子の森』の保全・管理～」(東京都大田区)

電子機器メーカーによる社有林保全活動。

キヤノン下丸子本社では、地域社会との共生や生物多様性保全を目的に、2002年以降緑豊かな『下丸子の森』を構内で育ててきた。グループで取り組んでいる「Canon BirdBranch Project」では、「鳥」という身近な生命をテーマに従業員や地域社会とともに「生命の循環」について考え、生物多様性の保全活動を推進しており、下丸子はモデル事業所として、この森の保全を通じて貢献している。この結果、40種類の野鳥の飛来を構内で確認しており、また生物多様性を考えるきっかけとして、観察会や野鳥撮影会を開催しWebサイトやXで情報発信を行う

など、活動を続けている。



2. 表彰式

2023年11月27日、KKRホテル東京(東京都千代田区大手町)において、持続可能な社会づくり活動表彰式を開催しました。

当日は、小林正明会長から主催者挨拶があり、来賓の環境省総合環境政策統括官 鎌水 洋氏よりご挨拶をいただきました。

続いて受賞者のサンデン株式会社 施設管理セクション ECOSチーム チームリーダー 柴崎 薫氏、NPO法人SDGs Spiral 代表・理事長 小川 亮氏、

株式会社サンエービルド工業 代表取締役 浅田 康詞氏、公益財団法人SOMPO環境財団 事務局長 鈴木 順子氏、キヤノン株式会社 社会文化支援課 主幹 天野 真一氏に表彰状が贈呈されました。

そして、記念撮影の後、各受賞者から受賞活動のご紹介をいただきました。

受賞者の皆様の今後ますますのご活躍をお祈りしますとともに、表彰式にご参加いただいた皆様へ、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。



環境大臣賞 サンデン 柴崎チームリーダーへの表彰状授



表彰式の様子



左から 環境省 鍾水統括官、SOMPO環境財団 鈴木事務局長、SDGs Spiral 小川理事長、サンデン 柴崎チームリーダー、サンエービルド工業 浅田社長、キャノン 天野主幹、小林会長、虫明理事長

3. 表彰制度の改正

お陰様をもちまして当表彰も2016年の制度設置から9年目を迎えました。これまで数々の素晴らしい活動をご応募いただき、また受賞活動として顕彰できましたことは本機構として大変光栄であります。

年数を重ね今後さらに充実した表彰制度を展開していくことを目指し、2024年度表彰に向け次のような制度改正を行いました。

■賞金の設置

環境大臣賞	5万円
地域づくり活動賞	2万円
E S D活動賞	2万円
資源循環活動賞	2万円
生物多様性保全活動賞	2万円

■ホームページからの応募受付

これまで郵送のみの応募受付としてきましたが、ホームページに応募受付フォームを設置し、データ送付による応募受付に対応できるようになりました。

2024 年度持続可能な社会づくり活動表彰 募集案内

本機構は、地域社会・国際社会への貢献、資源循環、環境教育及び生物多様性保全活動等、豊かな環境を引き継ぐため、環境、経済、社会が一体となった持続可能な社会づくりに資する活動を行う企業・団体を表彰する持続可能な社会づくり活動表彰を実施しています。ぜひふるってご応募ください。

【応募資格】 環境保全に資する持続可能な社会づくりに資する活動を行う日本国内に主たる事務所を有する企業・団体

【応募方法】 ホームページに掲載している既定の推薦書に必要資料を添えて事務局へご郵送ください。

【応募締切】 8月31日(土) 必着

【審査】 10月までに審査委員会において受賞者決定

【表彰式】 11月26日(火) 午後

【賞金】 環境大臣賞 5万円

地域づくり活動賞・ESD活動賞・資源循環活動賞・生物多様性保全活動賞 各2万円

◇◇ 2023 年度受賞者紹介 ◇◇

【環境大臣賞】 サンデン株式会社 施設管理セクション ECOS チーム

「サンデンフォレスト 森・人・工場をつなぐ新しい里山へ～20年の挑戦～」

【地域づくり活動賞】

NPO 法人 SDGs Spiral 「SDGs 万華鏡 “KAGUYA” プロジェクト ～子ども達の笑顔は未来への輝き～」

株式会社サンエービルド工業 サンエー会「プロジェクト「O」・鳥沼公園オオハンゴンソウ防除活動」

【ESD活動賞】

公益財団法人 SOMPO 環境財団 「「CSO ラーニング制度」によるユース世代の環境人材育成の取り組み」

【生物多様性保全活動賞】

キヤノン株式会社 下丸子本社 「Canon BirdBranch Project ～『下丸子の森』の保全・管理～」



第 27 回環境文化講演会 開催案内

【日時】 6月26日(水) 15:00～16:30

【場所】 航空会館 701 会議室 (東京都港区新橋)

【講師】 慶應義塾大学総合政策学部教授 白井 さゆり氏

【演題】 グローバル競争で高まる企業の ESG 経営の重要性

Environment (環境)、Social (社会)、Governance (ガバナンス) を考慮した ESG 経営は、先進国だけでなくアジアを含め世界的に取り組みが始まっています。いま、環境というファクターは企業の自主性に任される CSR 活動ではなく、明確な評価基準を設けられ企業が社会の構成員として環境に取り組む姿勢が求められるようになってきているのです。なぜ ESG 経営が重要視されているのか、なぜステークホルダーを重視しなければならないのか、経営や組織体制はこれからどうあるべきか、サステナブルファイナンスをどう活用していくべきか。前半では ESG 経営について解説し、後半ではさらに踏み込んで、非財務情報の開示や関連規制について世界の動向についても紹介しながら、国内企業が対応すべき有価証券報告書等における企業のサステナビリティ情報の開示についての法制定について解説します。

【参加費】 無料

【参加申込締切】 6月21日(金)



表彰応募、講演会参加申込の詳細については、QR コードからホームページを参照ください。

